



(奈良)

木簡の概要

阪原坂戸遺跡は、奈良市の東側山間部に位置し、木津川支流の白砂川中流域に位置する。調査地は北向きの斜面地で、現在その多くが水田である。調査の結果、全長八〇m、幅約六〇m、深さ一・〇~一・五m程を測る南北溝を検出した。溝の南端部には、大小の角礫を配して湧水点が作られる。ここから涌き出た水は溝内に導かれ、石組枡・木樋などを経て溝下方へと排

す。子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與、抑與之與、子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之、夫子之求之也、其諸異乎人之求之與、

(金谷治訳注『論語』 岩波文庫)

右に掲げた原文は、明經博士清原家の定本に基づき、それを唐の開成石經と対校したものであるが、「夫子之求之也」は木簡では「夫子之求之與」となつていて異なる。また夫子の上二文字は墨痕が薄く読取できないが「得之」ではない。上端部から墨痕のみえる部分までは、赤外線テレビにより、全く墨痕のないことを確認している。

木簡のほかに、同じ層位から墨書き器と須恵器片を転用した硯が出土した。伴出した遺物には須恵器・土師器などの土器類のほか、木製品・石製模造品などがあり、五世紀前半~奈良時代までのものが含まれている。

奈良・阪原坂戸遺跡

わかはらさかど

- 1 所在地 奈良市阪原町
- 2 調査期間 一九九二年(平4)一月~一九九三年一月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 木下亘・平岩欣太
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡
- 6 遺跡の年代 五世紀~八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

8 木簡の訳文・内容

(1) □□夫子之求之與其諸異乎

(253)×21×7 081

出土している。墨書は高杯の外側面にあり、「**〔俾カ〕**」と読める。

「俾」は卑に通じる。「顆」(果)は万葉仮名にはないが、数量の單位に用いる助数詞として、清瓜二十果、醤瓜十四果の例がある。「ヒチシ□」「ヒツシ□」と読めるが、「櫃し□」の意か。硯には全面にわたって墨痕があり、わずかに「志」「直」「牛」などの文字を読みこれたにすぎない。

阪原阪戸遺跡では、五世紀前半から奈良時代に至るまで継続して祭祀が行なわれた水源遺構が検出された。三重県上野市の城ノ越遺跡などとともに、水源祭祀遺構として稀有の価値をもつ。その溝中の堆積土の中層から、飛鳥～奈良時代の多量の土師器・須恵器、数多くの木製品(簷串を含む)などが出土し、右の木簡・墨書土器・硯が含まれていた。木簡・墨書土器・硯の出土は、水源祭祀遺構に近接して奈良時代には官衙的施設の存在したことを示している。

学令によれば、大学・国学で学ぶ全ての学生は、『論語』と『孝經』を学ぶことが必須とされた。『論語』の習書木簡は、そうした学生から出身して官人となつた人物が阪原阪戸遺跡の近傍にいたことを示している。墨書土器や硯の出土も、それを裏付けている。

阪原阪戸遺跡は、奈良市の中心部から直接距離にして約10kmほど離れた東の山中に所在する。奈良時代には、平城遷都直後の和銅四年正月に木津川沿いが東海道となつたが、添上郡柳生郷の阪原阪戸遺跡の場所から、布目川沿いをたどり、伊賀国府に至つて東海道

に合流する捷路を想定できる。五世紀前半以来、水源祭祀が行なわれてきた地に、官衙的な施設が設けられたと推定することも可能だろ。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所「阪原阪戸遺跡(阪原遺跡群第二次)発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報 一九九三年度』一九九四年)

同附属博物館『大和を掘るIII—一九九二年度発掘調査速報展』(一九九三年)

(1/7・9 木下亘・平岩欣太)
8 和田萃

